水の特別賞

水との共存のために

川口市立上青木中学校　三年　林　鈺景

僕たちは水と共に生きています。喉が渇いたら、水を飲み、体が汚れたら、水で洗います。水は僕たちの生活にとって必要不可欠なものです。水が使えるのは、当然のことのように思うかもしれません。しかし、世界全体に目を向けてみると、その当然のことが、いかに素晴らしいことかがわかります。

開発途上国では、経済の活性化を優先するあまり、環境を整えることを後回しにすることがあります。工場から出る排水や生活排水などで、川や湖などが汚染され、綺麗な水を飲めず、水不足が起こります。そして、世界の国々の中で、水道水をそのまま飲むことができる国は、なんと一五〇ヶ国中十五ヶ国しかないのです。確かに僕が中国に帰ったとき、水道水を飲んだら、

「水道水は飲むな。」

と伯父に怒られました。当時はなぜ怒られたんだろうと疑問に思っていましたが、中国は水道が完備されていなく、汚かったのだと思います。日本では蛇口をひねれば綺麗な水が出てきます。この当たり前を世界の人々に届けたいです。そのために、僕たちにできることはなんでしょうか。

僕は2年生の頃、家庭科の授業で「バーチャルウォーター」を学習したことがあります。「バーチャルウォーター」とは、輸出食料を生産するときに必要とする水の総量のことです。つまり、食料の輸入は、形を変えて水を輸入していることとも考えることができるのです。この観点から水不足の改善を考えてみたいと思います。

僕たちは、日本からでは見えない外国の水である「バーチャルウォーター」に依存しています。なので、日本の過度な食料の輸入を防ぎ、食料自給率を向上させる必要があると思います。なぜなら、外国からの食料の輸入量を減らすことで、その国から輸入した食料の生産で使われる水を節約することができます。例えば、一キログラムのとうもろこしを生産するためには、一八〇〇リットルもの膨大な水が必要であり、この輸入を制限することで、大幅に水を節約できると考えられます。結果的にその国の水不足を間接的に改善させていることになるのです。

そして水不足の国々への輸出を多くする必要があると思います。日本は数少ない水が豊富な国です。多くの水を要する輸出は、そういった水が豊富な国がするべきだと考えます。そのためにも、前述にあるように食料自給率を上げなければなりません。その理由は国内の食料に有余が生まれて、外国への輸出に繋がるからです。

僕たちにできることは、食料自給率を向上させることなのです。その方法として、主に三つあると考えます。一つ目は、地元でとれた新鮮な食材を消費する「地産地消」を取り組み、国産の食材を応援することです。二つ目は「今が旬」の食材を食事に多く取り入れることです。三つ目は、食料の無駄な消費を減らし、食料輸入の必要性を抑えることです。また、食べ物を残して捨てることは、水を捨てることと同じなので、あってはならないことです。この三つの取り組みをすることで、国内が潤い、外国への輸出に繋がります。

世界の水不足は決して僕たちに関係のないことではありません。水不足により外国の穀物や農産物に支障をきたし、日本の食卓にも影響が出てしまうことが実際にありました。そういったことをなくすためにも、僕たちは食生活の中、食べ残しをなくしたり、国産の食材や今が旬の食材を買うようにしたりなどの取り組みを意識して行いたいと思います。この意識の積み重ねが、水不足の改善に繋がることを信じて。